

英語学習の *Doing, Feeling, Thinking* (1)

竹内 理 Takeuchi Osamu
(関西大学)

昨今、さまざまな形態の学習を論じる際に、自己調整学習 (SRL: Self-regulated Learning) というフレームワークが注目を集めている。この SRL においては、ゴールの設定がまず何よりも大切になる。加えて、学習行動と関係する *Doing*、学習者の情意に関わる *Feeling*、そして学習計画・メタ認知に関わる *Thinking* の3分野が重要なものとして取り扱われる。本連載 (3回) では、この3分野のそれぞれについて、英語授業や学習と関係する具体的な問題を取り上げ、ゴールの設定と関係づけながら論じていくことにしたい。

1 種類が多だけでよいのか

今回は、実際の学習行動に関わる *Doing* の分野について考えてみたい。英語授業において生徒のとする学習行動の多くは、教員の教授活動の選択を反映して決定される傾向にある。つまり、教員が和訳を重視すれば、生徒も和訳という学習行動をメインに据えることになり、教員が音読を重視すれば、生徒も音読という学習行動をメインに据えることになる。そんな中で、次のような会話が、とある中学の英語教員間で交わされていた。

A:「生徒が音読に飽きてきたみたい。真剣にやってくれないの。」

B:「うーん、どんな風にやってるの?」

A:「そうね、(やり方を説明)こんな感じかな。」

B:「A先生、それはレパトリーの問題かも。僕なんか20種類はレパトリーを用意して、新しいやり方をどんどん入れてるよ。」

A:「B先生、すごいわ。20種類も知っているの? 私はせいぜい4~5種類しか知らなかった。」

B:「それじゃ生徒も飽きてくるよ。」

この会話に何かひっかかるものを感じながら、先日、書店の英語教育書のコーナーで、教師向けの音読指南書を何冊か手にとってみた。すると、この会話のB先生と同じような考え方で書かれている書物が結構多いことに気がついた。つまり、音読のバリエーションを数多く示すことに重点が置かれている書籍が結構多いのである。「四方読み」「リード・アンド・ルックアップ」「パラレル読み」「フレーズ読み」「ロールプレイ読み」「リレー読み」「時差読み」「キーワード読み」「なりきり読み」「虫食い読み」「あいの手読み」「逆さ読み」「通訳読み」「足し算読み」等々、発案者の思いが込められた実に多くの音読活動のバリエーションが、そこには紹介されている。

もちろん、英語教員が音読活動のバリエーションをたくさん持つこと自体は、決して悪いことではない。確かに学習者の興味・関心は、異なるものに対してより強く向けられ、注意資源の配分量も上がる傾向にある。したがって、多様な活動を適宜導入して授業を進めていくことは、それ自体悪いことではない。しかし、この際に、新奇性(目新しさ)の観点のみを基準にして活動を選択・導入していくアプローチは長続きしない。このアプローチだと、常に目新しいやり方を追い求め続けるという悪循環に陥ることになる。筆者は、そんな状況に陥ることを避けるために、新奇性とは別の観点で活動を選択し、組み合わせて一連の流れにすることが大切であると考えている。

2 ゴールは何なのか

新奇性に代わる1つ目の観点は、ゴール適合性である。換言すれば、何のために音読をさせるのか、ゴールを意識しながら活動を選択することを意味する。音読の利点(突きつめればゴールと関連する)

としては、たとえば、

- (1) 言語材料の内在化につながる
 - (2) 音と文字をつなぐ架け橋となる
 - (3) 音声・韻律面での習熟につながる
 - (4) 文構造や文法ルールの理解につながる
 - (5) コミュニケーション活動のモデル提示につながる
- などがあげられており、比較的多岐にわたっている。ということは、どの利点に注目するかにより、選択される音読活動が当然変わってくるはずである。たとえば、(1)の言語材料の内在化を第一に考えて音読活動をするのであれば、「リード・アンド・ルックアップ」など、生徒の短期記憶に負荷をかける音読活動を中心に選ぶべきであろう。(4)の文構造の理解を第一に考えて音読活動をするのであれば、ポーズの位置を強調し、文法的な切れ目を意識させるような音読活動が必要となるはずだ。同じく(4)の文法ルールの理解にゴールがあるのなら、目標文法項目を空白にしておくような、いわゆる「虫食い読み」のような音読活動も有効になろう。こう考えると、音読活動のレパートリーというものは、新奇性の維持のためではなく、ゴール達成にふさわしい活動を選択するという観点から持ち合わせるべきであることがわかる。

3 負荷をどうかけるのか

「ゴールを念頭において活動を選択する」というゴール適合性の観点に加えて、「適切な負荷を与え、活動にチャレンジの要素を持たせる」という認知負荷の観点も、活動の選択・組み合わせにおいては重要となろう。最近の学習理論によると、負荷を生徒がほとんど感じないような活動をいくら繰り返しても、これは能力の伸長につながらないという。一方で、少しだけ負荷を感じるような活動にチャレンジさせ、それがうまくいった時には能力の伸長が期待できるという。このような考え方にに基づけば、負荷の度合いを基準として活動を選択し、組み合わせ、チャレンジの度合いが徐々に上がっていくように提示していくことが大切となる。もちろん、生徒によって負荷を感じるポイントや度合いは異なるはずである。このような場合に備えて、いくつかの音読活動(や題材)をクラスターとして同時に提示し、

一定の範囲内で学習者の英語レベルに応じて取り組む活動を変えていけるような、学習の個別化も大切となろう。

またこの観点では、足場かけ(Scaffolding)の方法も重要となる。足場かけとは、他者からの手助け提供のことを意味する。足場を提供してもらえると達成できるような活動は、ロシアの心理学者ヴィゴツキー(L. Vygotsky)の言葉を借りると、「発達の最近接領域」(ZPD: Zone of Proximal Development)に入った活動であり、生徒の能力伸長にふさわしい活動といえる。ただ、このようなZPDに入った活動でさえ、足場をうまく与えられなければ、単なる「できそうで、できない」活動にとどまってしまう。そこで、認知負荷の観点に基づいて活動を選択・組み合わせる場合には、足場かけの方法を常にセットにして考えていく必要がある。なお、音読における足場かけの一例としては、ペア活動やグループ活動などを通して相互に助け合いを行うような、いわゆるピアサポートの利用が考えられる。

今回は、まず教室場面での生徒の学習行動(つまり*Doing*の領域)が、教師の教授活動の選択によって影響されることを示した。その後、音読というポピュラーな教授活動を一例として、活動選択の基準について考えてみた。活動のレパートリーに幅があることは決して悪いことではない。しかし、レパートリー拡充が自己目的化してはならない。マンネリや飽きからの真の脱却の鍵は、さらなるレパートリーの拡張ではなく、ゴールや認知負荷という異なる基準を加えることの中にこそ隠されているのである。

【参考文献】

- 竹内 理(2007)「Column 5 音読を楽しもう」『達人の英語学習法—データが語る効果的な外国語学習法とは』(pp.80-82) 東京：草思社。
- 竹内 理(2010)「学習者の研究からわかること—個別から統合へ」小嶋英夫、尾関直子、廣森友人(編)『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』(英語教育学体系第6巻)(第1章, pp.3-20) 東京：大修館書店。
- Zimmerman, B.J. & Shank, D.H. (Eds.). (2001). *Self-regulated learning and academic achievement*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum. (塚野州一(編・訳)(2006)『自己調整学習の理論』京都：北大路書店。)